

## 擬似環境への直接体験（参加）行動

### ——メディア情報接触から

### 「現場スポットへのシフト行動」——

校條 善夫

#### 1. 本論のねらい

いわゆる「擬似環境」は、G.タルドの『世論と群衆』で論じた古典的な解説、つまり散在する個人が新聞というメディアを介して共通の関心事を通じて結ばれるという指摘に始まるといってよかろう。ワルター・リップマンは『世論』で、ステレオ化した擬似環境下での世論はメディア側の情報操作による作られた世論だと指摘した。日本では藤竹暁氏の『事件の社会学』や同氏の『メディアになった人間』での「擬似環境の環境化」等でメディアが新しい環境を作っていること、あるいは適応すべき環境の指定を指摘している。これらは、マスメディアが作る間接環境が人間環境になっているという点で共通しており、その概念はマスコミ論の原点であると同時に現時点での終着点ともいえる。D. J. ブーアステインの『幻影の時代』の「擬似イベント」も、マスメディアが人間行動に与える基本的なインパクトとしての原点であり終着点といえる。しかし今や情報社会の段階に至って個人の間行動は、「擬似環境」に支配され影響を受けながらも、マスメディアは勿論ニューメディアとパーソナル・メディアに触発され誘発されて、「擬似環境」の中へ直接参加し体験するパターンが喚起され没入燃焼する行動特性が以前に比べて格段の差で増幅しているのではないのか、というのが本題の基本的なテーゼである。擬似環境から現場ス

ポットへシフトするいわば「擬似環境への直接参加」とでもいえる現象である。これの事例検証とその形成究明が本題のねらいである。

#### 2. 擬似環境への直接参加の歩み

##### 1. 口頭伝達の擬似環境

人間行動におけるこのようなパターン、すなわち「擬似環境」の存在は、別に大衆社会の成立以後に現れた特異な社会現象ではない。実は人間が集団を作り社会を形成した段階から存在したことはいうまでもない。古くは人間は祭司や長老や隣人から珍しい、まだ見知らぬ土地の話や旅の話をきいて、しかし大変な決意をして出かけた例もあったであろう。芭蕉の「奥の細道」の文学紀行にしる、北斎が富士山や東海道の風景を描く旅にしる、あるいは円空が木彫り仏像を彫りながら歩いた修行行脚にしる、それらはその時代における彼らの「擬似環境への直接参加」であったはずである。擬似環境は都市の成立そしてマスメディアの先駆としての新聞の誕生等と関連して優れて近代社会の特性を反映した概念ではある。しかしそれ以前の最も古典的なメディアであるパーソナル・メディアは口頭伝達であるが、口頭伝達によって「擬似環境」を自分以外の他人に提供し個人に行動を決意させたことは確かである。その点で紛れもなく擬似環境の設定であり、人間社会における最初の情報環境の設定に他ならない。口頭伝達による擬似環境の想定は個人にとって魅力あ

る大きなインパクトであったに違いない。この情報伝達による情報の精度や充足度等、情報の評価の点で前近代社会の情報を一概に否定的に断言することはできない。なぜならここにはコミュニケーションの独特の過程、つまり情報をアレンジしてからの発信や受け手の情報解釈の主観性等はどの段階でも不可避であるからである。問題は例外なく誰もが「擬似環境」に影響されるのかどうかということである。実際は極めて敏感なレベルからその反対に無反応に近いレベルまで存在しよう。また同時に重要な点は個人がそうであるように、個人を包含しているその時代の社会の様相によっても大きな差異が生じてくる。つまり「擬似環境」への接近の難易度である。前近代社会においては、交通の要である道路、橋梁、渡し船、渡し人夫、駕籠、護衛、宿や休憩所等いわばハードの整備がどの程度充実し安全であるかが、そしてもうひとつは情報伝達のための情報源の有無やその多少（周りに情報発信者が大いかに少ないか）と情報流通の自由度、これは交通の自由度（関所の存在や旅行の制限）とほぼ比例するだろうが、これらいわばソフトの整備がどの程度充実し安全であるか、これらが情報接触による個人の「擬似環境」接近への衝動度を大きく左右する。ここで前近代社会を例として情報・コミュニケーション・行動のメカニズムを考えると、情報接触—擬似環境認知—擬似環境への直接接近行動の3つがあることが先づ確認できる。次にこの一連の過程は、(1)個人の擬似環境への個人別衝動の差異（この差異は個人の先有傾向や学習行動によって左右される）と、(2)個人をめぐる社会の社会環境と情報環境の差異、この(1)と(2)の2つの要素が働き合う両者の力学、両者の相乗効果という定式が考えられる。この定式は前近代社会にとどまらずその後の社会においても同様の要素が働いているといえよう。江戸時代においては江戸の火事の野次馬、お遍路巡礼の旅、「おかげまいり」のお伊勢参り等はその一例である。これらは情報接触—擬似環境認知—情報環境

への直接行動の結果として十分に説明できよう。注意しておきたいのは、当時誰もが同じではなく、個人別衝動度の差異と個人をめぐる社会環境や情報環境によって段階は様々だということである。

## 2. マスメディア情報の擬似環境

「擬似環境」の概念自体、W.リップマン流にえば「マスメディアによって作られた、もうひとつの現実」にほかならない。近代社会の到来、都市の成立、独立ないし孤立した個人の登場、その集合体である大衆の成立を基盤に、メディア技術の進歩と発展は、新しい産業体としてのマスメディア産業を成長させた。個人の口頭伝達ないし個人の手による書簡に加えて、大量情報を広域に安価に速く大衆レベルの知的娯乐的関心事に集約して伝達するマスコミュニケーションが成立した。ここに近代社会の市民は、パーソナルとマスのメディアを通して「擬似環境」の世界を体験することになる。勿論今日のマスメディアに至るまでには、ほぼ傾向を同じくして各国とも初期には政治論争の手段として政論新聞でその機能を果たし、続いてイエロー・ジャーナリズムで代表される大衆娯楽路線の商業新聞が登場し、そして報道メディア、娯楽・実用メディア、広告メディアとしての現在の大衆新聞の到来となる。

ここでマスメディアのもとでの情報・コミュニケーション・行動、すなわち情報接触—擬似環境認知—擬似環境への直接接近行動をタイプ分けしてみると、次の4つのタイプに分けて考えられる。

- (1)興味関心型（やじ馬型）
- (2)調査型（ジャーナリスト型）
- (3)自由解放型（体制変革型）
- (4)人間交流型（ヒューマン・インタレスト型）

### (1)興味関心型（やじ馬型）

マスメディアを通じて個人の興味関心が芽生えたり、増大したり、夢中の境地に導かれ、

メディアが提供する擬似環境へ行動を移す。このタイプがマスメディア社会では最も多く行動の質も多種多様である。

**<事例-1>モスクワでのクーデターを観るためのツアー企画**

'91年8月22日ロンドン発時事によると、「歴史的現場を一目見たいという観光客がドットソ連に押し寄せることになりそう。ソ連国営旅行会社インツォリストのロンドン支店によれば、(略)予約は通常の一ヶ月分の予約をはるかに上回り、キャンセル待ちのリストが膨れ上がっているという。(略)既にソ連入りしていた欧州からの団体旅行者のほとんどは身の危険よりも『歴史への参加』を優先させて帰国を拒否したという」(読売 '91. 8. 23. 見出しは「『歴史的現場見たい』観光客ワンサ)」

この記事が示すことは、擬似環境への直接接近行動の典型といつてよい。ロンドン市内と周辺住民はテレビや新聞が報ずるクーデターをあたかも見せ物としてとらえ、クーデターを観光資源に転化してしまったのである。まさに国際的ヤジ馬観光団である。擬似環境への直接接近行動は前近代社会、つまりマスメディア社会以前から存在していたにしろ、マスメディア社会はその規模、種類、量でははるかに膨大である。

**<事例-1にみる擬似環境への直接接近行動の要件>**

1) **安全性** —— 先づ行動の安全性の保証がある。モスクワでのクーデターは市内の中核部の一角で衝突があっただけで、しかも8月21日未明以外は全くといってよいくらい平静であった。筆者自身も18日夜から偶然所用でモスクワに滞在していたのでその間の事情はよく承知している。勿論事態の異状さは最悪の状況を招く可能性があったことも事実ではあった。しかしこの報道の時点では既に事態は平静の方向に向かっていた。

2) **話題性** —— 世界史的な大事件であり、緊迫度や希少性とも社会的な注目度では最

高級にランクされよう。

3) **新鮮性** —— 話題性とも共通するが、興味関心性には多少ともこの「新鮮さ」がないと成立しないだろう。

4) **娯楽性** —— この事例で娯楽性を指摘するのは、不真面目にすぎるが、この場合は項目のタイトルにしている「興味関心」に置き換えた意味にとっておきたい。その点では「やじ馬性」そのものの典型といつてよからう。

5) **単純性** —— マスメディアを通じての大衆である個人の行動は、シンプルでわかりやすいものでなくてはならない。これは個人の直接接近行動の基本的な要素である。

これら5つの要素がどの場合も均等に作用するというのではなく、いずれかの要素がより強く作用するケースもあれば、いずれかがより弱く作用するケースもありうるのが当然である。次にやはり同じく「興味関心型」ではあるが、偶然性や突発性のない極めて日常的なイベントを事例として考えてみよう。

**<事例-2>相撲の二子山親方がNHKの番組「放送とわたくし」(1992. 3. 18. 放送)の中で、協会はラジオ・テレビとも放送による観客動員の減少を心配していたが、実際はその逆で放送によって人気は上がり、観客動員は増加したと話している。この時の放送記録によると親方は、「初めてテレビ放送するときも、テレビ放映されるとお客が入らないんじゃないか、と心配する声もあったんです。ところがお客はよく入るようになった。それまで、戦前のことですが、蔵前国技館のような大きなものを作って、私も現役でしたが、そんなことを気にしながら土俵を勤めたものでした。テレビは相撲の普及に役立ってくれたと、このように思っています。」(NHK「放送とわたくし」番組担当者 林貴子氏記録の出演者発言記録 平成4年5月13日付筆者宛文書) この二子山親方の収録ビデオで放送時間の都合上割愛した部分に戦前のラジオ時代の思い出があって、「昭和3年から大相撲の実況中継が始まったころに…(略)…当時の日本相**

撲協会の幹部の中に、ラジオの実況で勝負の結果がわかってしまうと、わざわざ国技館に足を運ぶ人がいなくなるのではないかという議論が起こったそうです。ところが反対に、実況を聞いて相撲を見にくる人が増えたといっています。テレビが始まったときも同じような論議がおこなわれたということですが、実況を見て、生で、自分の目でも見てみたいと思ったのか、やはり動員数は増えたといっています」と興味ある証言がある。（同上文書より）<sup>(1)</sup>。

相撲で危惧されていたのと同様のことが、今プロサッカーJリーグでいわれているという。「Jリーグの目的は競技場へ多くの観客に来てもらうことによって、日本のサッカーのレベルを上げることであり、権利（注．放送権のこと）をビジネスにすることは目的を助ける手段でしかない。だから『テレビで放送してもらうことが必ずしもいいとは思っていない』（川淵チェアマン）。『テレビで放送するから競技場に行かない』という層が出てくることを危惧しているのである」（「日経エンタテイメント」1992. 8. 5. 特集「Jリーグの商品価値」）。

ちなみに最近のJリーグの観客動員数は、1992年10月7日開催の読売クラブ対清水エスパルスのゲームには大会最高の入場者数3万9千32人を記録しており、好成績をあげている<sup>(2)</sup>。

ただし個人の行動はメディアに影響されるが<sup>(3)(4)(5)</sup>、それが娯楽やレジャーの場合には、単独での行動ではなくグループや仲間等集団でのケースが多いことは注目しておいてよいのではないかと<sup>(6)(7)(8)</sup>。

現代社会のマスコミを通じてのイベントで代表的なものをあげてみると、プロ野球、高校野球、相撲、マラソン、ゴルフ、テニス、サッカー、ボクシング、ラグビー、競馬、F-1レース等、スポーツ・イベントが圧倒的な人気である。これらはいずれもテレビを主として新聞、雑誌、ラジオを通じて大衆動員に成功している。メディアが提供する擬似環境を認知してその擬似環境が提供している素材へ

直接接触しようとする。現代社会のマスメディアを介しての擬似環境への直接接触行動、擬似環境からのシフト行動は質量ともに高度かつ大量で日常的なものといえよう。テレビ、ラジオ、新聞、雑誌等マスメディアとの接触と実際の行動動機との相関性を直接の目的とした調査は今現在手元がないので今後の課題としたい。しかしこれに関連するいくつかの調査結果や資料を文末に紹介しておきたい。ここで<事例-2>にみる擬似環境への直接接触行動の要素について検討しておく。

#### <事例-2にみる擬似環境への直接接触行動の要件>

<事例-1>に比べてこの場合は、5つの各要素が極めて均等な比重で作用しているように考えられる。あえて順序をつければ、1) 単純性 2) 娯楽性 3) 新鮮性 4) 話題性 5) 安全性 としてはどうか。

- 1) 単純性 —— 全てこの種のスポーツはサンプルでわかりやすい点に特徴がある。マスメディアが取り上げやすい対象でもある。大衆が没入できるポピュラーなスポーツである。
- 2) 娯楽性 —— ビッグ・イベントの勝敗の行方、人気選手のファインプレイ、ファン気質の燃焼、エキサイト場面の興奮等は十分に個人の娯乐的期待を満足させてくれる。
- 3) 新鮮性 —— 「筋書きのないドラマ」といわれるように、目の前で展開されるゲームは常に新しい歴史を創造していく。この現実には迫りたいという要求はメディアの奥へ個人を駆り立てる。
- 4) 話題性 —— マスメディアに登場する選手やチームあるいはそのスポーツ空間自体が大衆の注目を浴びファン層を魅了する。ゲームの流れや選手の一挙手一投足が大衆の注目の的になり、話題の種は豊富で興奮させる。
- 5) 安全性 —— 一見無関係のように見えるが、実は人々はこの安全度を確認して行動を起こしている。事故や事件に対する警戒的な面ばかりでなく積極的な面で接近行動

中の快適性や自由度も当事者の行動の尺度の中に入っている。

これら「興味関心型」における5つの要素は、擬似環境認知からシフトして、素材である現場スポットへの接近行動を誘うものではあるが、マスメディアを通じて提供される擬似環境の全てに対して作用するものではない。

次にあげる「調査型（ジャーナリスト型）」の場合は、それとは別の要素が作用する。

## (2) 調査型（ジャーナリスト型）

擬似環境への直接接近行動の2つ目のタイプは、情報源の素材自体への調査や問題究明を目的として、直接情報源に接近して他者が既に提供した擬似環境の実態を究明するために自ら現場体験する行動である。だからこの場合は新しい擬似環境の提供を伴う。マスコミの記者や専門分野の研究者の例がこれにあたる。この場合の代表的な事例には、湾岸戦争、ベルリンの壁の崩壊、ユーゴの内戦、カンボジアの内戦処理等、国際的大事件があげられる。国内では雲仙普賢岳の噴火や火砕流、ロッキードやリクルート事件等の調査報道、刑事裁判事件の真相究明、ガンやエイズ等の防止キャンペーンのための調査報道や問題究明等があげられる。擬似環境からシフトして直接接近行動を成立させる条件、つまり個人の側からはその動機であり、素材の対象の側からするとその性格であるが、それは前の「興味関心型」とは趣を異にして次の5つの要素が考えられる。

- 1) **異常性** —— 自然災害、国際戦争、内戦、事件、事故等、日常性からかけ離れた事象の発生に対してその真相、原因、予測や意義について報告するために、擬似環境の対象となった発生現場へ赴き、直接体験行動する。
- 2) **社会性** —— 広範囲の地球規模の環境破壊から狭い範囲のローカルや個人のレベルでの反社会的な事柄まで、人間性、社会規範、社会的トレンド等社会的な話題性の高い対象をおいかける。

3) **緊急性** —— 時間的速報性を要する対象である場合が多い。

4) **公開性** —— 調査結果の公開や知り得た情報の広報を要するもの、あるいはその公開や広報を求められる性格をもつ。

5) **歴史性** —— 緊急性はなくてもその擬似環境が歴史的に記録されるべき価値をもつ場合がある。例えば考古学的発掘についての情報があれば、提供された「擬似環境」の発生源である現場へ出かけ、直接体験行動をする。最近では専門的研究者や記者ばかりでなく、アマチュアの愛好者も直接体験行動のために現場に駆けつけるケースも少なくない。「興味関心型」と重複するケースともみられる。

## (3) 自由解放型（体制変革型）

ペレストロイカ—東欧自由化の波—ベルリンの壁の崩壊—東欧の解放—旧ソ連の崩壊へとつながる、一連の共産主義体制の変革は、マスメディアが提供する西側の情報、すなわち西側の「擬似環境」を現実と認識した結果、その擬似環境へ直接接近したい衝動ないし欲求が駆り立てられ、初期には冒険的な危険をおかしてあえてその「擬似環境」に向かって直接接近（越境）行動を起こした。特に分裂国家であったドイツの東側の旧東独では、旧西ドイツから送られるテレビ映像、すなわち「擬似環境」を認知して、旧東独市民はその擬似環境への直接接近行動へと導かれたことは、この場合の代表的な事例といえる。(p.130の図1参照) 加えてこの場合は旧東独の市民は、自国内の民主化の動きを西側のテレビを通じて知って勇気づけられ、余計直接接近行動（越境）に拍車がかかった。メディアが提供する擬似環境がこれほど切迫感をもって人々の認知の世界に「現実化」し直接接近行動への欲求を高揚させた例は少ないのではないか。

旧東独の変革とテレビの影響については次の報告がある。

<事例—1> 「ことに夏（注：1989年8月）

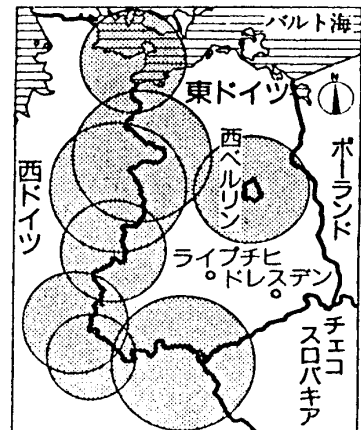
以後、大量に逃げて行く人たちの姿を東ドイツのメディアは指示をされて伝えないけれども、西のメディアは毎日毎日伝える。これをもう東の人は毎日みている。そしてそれが増幅されていく。益々多くの人が出ていく。『革命』的状況をいやでも応でも毎日リアルに見せられる、という事では非常に大きな役割をテレビが果たした。これは壁崩壊の前後に統一熱を巻き起こしたのとともに、非常にはっきりテレビの影響が見える現象でしょう。」（『総合ジャーナリズム研究』No.132 1990年「春」号 所収 「東独・情報化政策の遅れ、民衆の『革命』」永井清彦）

**<事例-2>** 佐藤 毅氏（一橋大学教授）は1990年8月ユーゴスラビアでの第17回国際マスコミ学会の報告の中で次のような紹介をしている。「東独の場合、メディアの役割が大きかったが、…(略)…東独の大量の移住者の国境越えシーンや東独でのデモを西独テレビが放映していたことによるという指摘があり、またハンガリーでも1988年から9年にかけて反乱記念日のデモの盛り上がり、それをメディアが報道したことで、次の記念日にはさらにデモが拡大し、政変へ連なっていったことが発表された。」（朝日新聞 1990.9.13.）

**<事例-3>** 朝日新聞川本裕司記者のレポートでは次のように伝えている。「西ベルリンにある地域公共放送局、自由ベルリン放送協会では、東独国营テレビが取り上げなかった東独国民の西側脱出を連日にわたり報道した。同局ニュース番組の司会者、アルビット・パール氏（53）は『米国のマスコミがベトナム戦争の現実を報道した結果、米国内で反戦運動が強まったように、東欧の動きを克明に伝えた西側のテレビは東独民主化に大きな影響を与えたと思う。東独市民からは、我々が放送する娯楽番組やCMを通して、西側の豊かさを知った、と何百通もの手紙が寄せられている』という<sup>(9)</sup>。」（朝日新聞 1990.3.27.夕刊）

この場合の直接接近行動を構成させる要素は、「興味関心型」とは全く次元を異にしたレ

図1. 東ドイツで西ドイツの地上波テレビ放送がみられる地域（円内）



朝日新聞1990.3.27.夕刊（東ドイツの週刊誌「ポツェンポスト」から）

ベルで考えなくてはならないだろう。次の5つをあげてみたい。

- 1) **自由への解放要求** —— 西側から提供される映像を通して形成された個人的社会的自由への憧憬は、個人の内部に蓄積されそれが解放欲求として成熟度を重ねていったことは、誰しも想像のつくところであろう。
- 2) **統制監視からの離脱要求** —— 旧ソ連のKGBをはじめどの国においても体制側の厳しい組織的監視体制の活動が存在していたことはよく知られている。市民の間に密告制度があったことなどは衝撃的な事実としてうけとめられている。これからの離脱、脱出は長年の欲求ではなかったか。
- 3) **生活上への期待** —— 東西の生活レベルの格差は、西側のマスメディアを通じて認知され、早い時期に同じレベルに到達したいという期待は当然あったに違いない。豊かな暮らしを映し出す情報、その「擬似環境」を認知してその現実には直接接近したいという期待である。
- 4) **民族共同体形成への期待** —— 分裂国家の再統一によって東西ドイツがひとつとなり、国民大衆の間では自由の満喫や生活上への夢が実現するのではないかと

期待が「擬似環境」-「認識」-「直接接近行動」への強力なファクターになった。この事例は旧東独をモデルにしているが、他の社会主義圏の諸国の体制変革にも共通する点でもある。

5) 安全性保障への信頼 —— 冒険性の高い越境移動ではあるが、旧西ドイツでの生存と生活の安全性の信頼が、実はこの行動の基底にあって行動の出発点であり行動中の原動力でもあったことは想像に難くない。

この自由解放型(体制変革型)は、当面旧東独の場合を念頭においたものなので一般論からすると個別性に傾斜した側面も否めないかもしれないが、西側からの活字媒体の移入が厳重な検閲で禁止された状況の中で、唯一電波媒体が提供する擬似環境-その認知-擬似環境への直接接近行動であったことはたしかであろう。

#### (4)人間交流型(ヒューマン・インタレスト型)

このケースは、マス・コミュニケーション社会の中でのニューメディア・コミュニケーションを主舞台とする。マスコミは一方方向性メディアといわれているが、マスコミの成熟とニューメディアの出現でメディア社会全体としては、双方方向性の性格を強めつつある。同時にパーソナル・コミュニケーションのウエイトは増しつつある。新聞・雑誌の中でもみられるが、特にラジオ・テレビの電波媒体においてはパーソナル・コミュニケーションや双方方向のコミュニケーションの傾向が強くなってきた。活字媒体においては電話による投書やファックス投書あるいは写真投稿にその傾向があらわれており、電波媒体ではこれに加えてラジオ・テレビとも直接の生出演やビデオ上映がある。特に政治問題の番組で視聴者から直接即刻意見をきくアンケート世論調査はその典型といってよい。これはマス・メディアの中でのパーソナル・コミュニケーションである。ここではメディアの中で双方方向の人間交流が実現している。擬似環境への直接接近行動の最も新しいモデルである。

そして注目したいのは、パソコン通信による人間交流が登場してきたことである。

<事例-1>定年退職したサラリーマンOBが第二の人生を充実させたい目的でパソコン通信を使って新しい仲間づくりをしているという。(日経 1992.9.5.) 擬似環境は「メディアがつくる、もうひとつの現実環境」であれば、パソコン通信というニュー・メディアがつくる擬似環境の成立ということができる。同記事の中で、神奈川県在住で元商社マンの中村克己さん(75)は3年前からパソコン通信をはじめ、毎日の日課になっており、「通信を離れ、実際に集まる『オフライン・ミーティング』も頻繁に開き、親交を深めている」と紹介されている。擬似環境の中へ自分自身を動かしていく。ここでも擬似環境の認知過程を経て、擬似環境への直接接近行動という図式は成立している。マス・メディアとは別の新しい傾向として位置づけるのが至当であろう。同様の事例を紹介しておく。

<事例-2>日経の交遊抄(1992.8.10.)に書かれていることであるが、伊藤欣士氏(労働省職業能力開発局長)は、日夜パソコン通信に夢中になる毎日だそうであるが、「最初のころはていねいな長文の説明を何度もメールでいただいたが、それでもまどろっこしくなって、直接お会いする、いわゆるオフラインでのお付き合いとなり、休日には”先生”(注.伊藤氏のパソコン通信の指導者)のお宅まで押し掛けていくことが多い」と述べておられる。パソコン通信による擬似環境設定とその認知を経て擬似環境の中心部、この場合は情報発信者であるが、メディアによって作られた環境へ自分自信の身体を移動させていることは確かである。

#### むすび

マス・メディア、特にテレビによる擬似環境の伝達は、そのことによって個人の行動は満足し、擬似環境そのものに直接迫る行為は省略されるという、予測ないし推測が可能であるが、それとは反対に直接迫る可能性もあ

りうるうことをみることができた。それは単にメディアだけの作用ではなく、他の要素もありうるが、しかしメディア接触の影響として個人の日常行動に擬似環境へ直接接近する行動が多種多様に存在することがわかった。勿論個人の日常行動の範囲の中では、擬似環境への間接接触で充分満足しむしろこの方により満足感をえているケースもある。プロ野球中継の場合の詳細な多面的な画面の割付やショットはこの例になろう。内野席や外野席では到底見ることのできないピッチングの球質や選手の表情やスローの再生でのゲーム分析等はテレビの独壇場である。相撲中継についても同様のことがいえる。これは「**テレビ報道における情報加工**」とってよいのではないか。人々は「情報加工」度の巧妙さに魅了され満足する。こういう「**擬似環境の情報加工度への満足感**」は今日の特にテレビ・メディア社会の特徴であり、長所とってよい。特にバーチャル・リアリティー (virtual reality) やマルチメディア・コミュニケーションの世界は、この面の革新的進歩を示すものであり将来的にはこれらの日常生活への浸透は、受け入れる階層の特層化があるにしろ想像できる。いってみれば「**メディア環境に遊ぶ**」という状況は、今日のメディア環境の特質である。つまりこれは情報社会のメディア環境の特徴であり長所でもあるが、「高度に発達した間接メディアを通して非日常的対象を直接に情報受信できる」という点である。これはテレビ登場の当初より指摘されてきた点ではあるが、メディア社会の成熟とともに情報発信者側の情報加工度に加えて編集者の見識や問題意識の質の高さが、新しい視聴者層を開拓しテレビの魅力度を一層増加させていることも確かである。マクルーハン流に言えば、テレビは「低精細度」(low definition) メディアであるが、しかし今日の新しい段階を迎えて、テレビも「高精細度」(high definition) メディアでもあるということではできないか。

ここでこの論文の論旨、すなわち擬似環境—その認知—擬似環境への直接接近行動と

いう一連の現代情報社会における個人の顕著な特性に対して、以下の2つの論旨に疑問を提示しておきたい。

ひとつは『イメージを生きる若者たち—メディアが映す心象風景—』(藤竹暁著 有斐閣1991)の中で次のようにいっている。「いうまでもないが、情報が豊かな時代に育った若者は、実体験で世間を経験する以前に、情報を媒介にして間接的に、世間とはこんなものかというイメージを描いてしまいがちである。…(略)…また、処理すべき情報量が膨大になってしまっているから、それに追われて、実体験の領域をふやすことに費やすべきエネルギーが、少なくなっているという事情もある。この点については、改めて述べるまでもなからう」(同書 p.116)。つまりここでは擬似環境への直接接近行動の希薄さを指摘していると解釈できるが、この点は甚だ疑問である。

もうひとつは、「メディア・テクノロジーの高度化とテレビ文化の変容」(稲増龍夫「思想」岩波書店 1992年7月号)の中で次のようにいっている。『「擬似現実」と「現実」のどちらを選択するのかという二者択一的発想自体、古いコミュニケーション・パラダイムにこだわった立場である。…(略)…そもそも、両者を隔てていた先入観の壁は確実に崩壊しつつある。それらに優劣をつけるのではなく、両立させてしまうのが現代のメディア行動の真髓であり、そうした『多元的現実』の間を自由に往来できる能力こそが、次世代のメディア社会の基本要件になってくるのである』と結んでいる。稲増氏は湾岸戦争のハイテク戦争の例をひいて、実際の戦争とテレビ映像のいずれが現実かということ自体「古いコミュニケーション・パラダイム」だいう。この場合「二者択一的発想」という設定自体ここで持ち出す意義がよくわからないが、「二者択一的発想」という状況の問題提起自体、そもそも現代マス・メディア社会の当初から存在しえなかったのではないか。今の時点で問題にすること自体その意義を疑わざるをえない。第二に「多元的現実の間の自由な往来」であ



るが、「次世代」といわずとも、そもそも新聞の誕生以来「現実」と「擬似環境」両者間を人々は自由に往来していたのではないのか。また人々は「現実」と「擬似環境」との優劣評価で行動してはいない。ただ両者の区別をしながら行動してきただけではないのか。したがって一般論でいえば、「現実」と「擬似環境」両者の存在は明確な事実であるし、それが故のメディア環境の存在ではないのか。

ここで注目したいわば伝統的な擬似環境論の存続と藤竹氏のいう「実体験省力論」も稲増氏のいう「多元的現実の自由な往来論」も、実は現代情報社会においてはすべて内包し共存しているというのが自然であり科学的である。現代情報社会はマスメディア的環境とニューメディア的環境とを内包共存させているものといえる。そして現代情報社会は前者を継承しながら後者を発展させている。現代情報社会における個人のメディア接触のパターンを類型化していえば、

1. マスメディア的環境では、

「読む」(新聞・雑誌)

「聞く」(ラジオ)

「見る」(テレビ)

2. ニューメディア環境では、

「つなぐ」(セッティング)

「操る」(オペレーティング)

「選ぶとる」(検索)

ということができよう。また個人が情報接触する対象は、

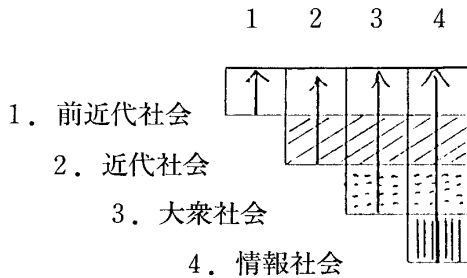
1. マスメディア的環境では「情報の定食ランチ」型である。送り手の主導権がより多く発揮される。

2. ニューメディア的環境では「情報のバイキング」型である。受けての主導権がマスメディア的環境よりより多く発揮されやすい。最近のバーチャル・リアリティー(virtual reality)の登場は「情報のバイキング」のレベルを越えて、いわば「情報の手作り交換」といった高度な技術的領域に達している。

この論文の論旨は上記二つのメディア環境

に共通して見られる個人の行動ということが出来る。個人の日常生活全体の行動をトータルで論ずれば、前者と後者が連続の中で共存している。そしてそのいずれかの性格の継承の優劣、強弱、多少、大小等の差異の存在はあるが、それは個体差によることもいうまでもない。また現代情報社会は同時にマスメディア社会の成熟期でもある。送り手の成熟と同時に受けての成熟でもある。情報接触—擬似環境認知—擬似環境への直接行動の最終段階で、(1)単にその場にいるレベルから(2)その場から情報メディアに向かって情報発信するレベルまでである。後者の(2)の事例では、子供がカメラに向かってVサインをおくこと、またプロ野球のタイガース・ファンがカメラを意識して風船をとばしたり、カメラの前で道頓堀に飛び込んだりすること。あるいは旧東独の変革期に東ドイツのデモの参加者が西ドイツのカメラに写る場所を選んでカメラに向かって「ドイツ、唯一の祖国」と書いたプラカードを高く掲げたことが何回もあったという<sup>(10)</sup>。これら(2)に示した事例は直接行動の中での「メディア効果を志向したアピール行動」といえる。これらの行動は成熟したマスメディア社会の環境の中で情報社会での個人の情報発信特性が発揮された状況でもある。図2は前近代社会から情報社会にいたる社会史の流れを示したものである。各前期の時代の伝統を受け継ぎながら次期の時代の新しい社会的性格が形成されていく。各社会の特性をどのように強くあるいは弱く受け継いでいるかは、個人をめぐる環境を含めて個体差の結果であろう。しかしはっきりいえることは、マスコミ社会が本格的に展開した大衆社会の伝統は情報社会においても生き続け影響をあたえているということである。「新しいメディア環境観」だけの社会観では一面的で非科学的といえる。今日ときに情報社会論の展開の中でこの傾向がみうけられることに懐疑の目をもって注目しておきたい。

図2. 人間形成に与える社会史的インパクト



【註】

- (1) 二子山親方のテレビ談話と殆ど同様の内容が、『日本相撲大鑑』（窪寺紘一著 人物往来社 1992. 7. 10.）p.282「ラジオ・テレビの時代に」の項にみられる。
- (2) メディアと個人の行動との関連についてよく整理された資料がある。イベントをコミュニケーションとして捉えた場合の基本的な特徴として次の5点があげられている。(1)同空間性・同時性 (2)情報の双方向性 (3)情報の体感性 (4)参加性（集客・動員機能） (5)自由操作性。このうち本論に直接関係するものは(3)と(4)といえる。『VIDEO RESEARCH DIGEST』No.291 1992. 9月所収「イベントの機能と効果指標 Part 2」山口一政。
- (3) 観光旅行とメディア接触との関係を調査したものの：『観光の実態と志向（第14回）』（日本観光協会編・発行 平成3年3月 p.62-66。
- (4) スポーツを始めたきっかけとメディアの影響を調査したものの：『余暇・レジャー総合統計年報'91』（生活科学情報センター編・食品流通センター発行 1991. 3.）p.446。
- (5) 若者がマスメディアの影響をうけていることを記録しているもの：『東と西』VOL.36 NO.6（同志社大学消費生活共同組合編・発行 1992.9.10.）所収 p.4。「特集—留学生との座談会—日本の大学生はなまけものか」。
- (6) 観光・レクリエーション・スポーツ等のための旅行に一緒に行った人を調査したもの：注3と同じ p. 347。
- (7) 宿泊観光レクリエーションの同行者の実態と意向を調査したもの：『観光白書 平成3年版』（総理府編・大蔵省発行 平成3. 5.）p. 35。
- (8) 若い女性の旅行とメディア情報を紹介したものの：『地理』（第29巻第12号 昭和59年12月1日

古今書院）所収 p.50-57「“アンアン” “ノンノ”の旅情報—マスメディアによるイメージ操作—」原田ひとみ。

- (9) いわゆる電波の「スピルオーバー問題」で、東欧では約50万世帯が受信していたとレポートしているもの：「朝日新聞」1990. 3. 24. 夕刊 p.16-17「スピルオーバー問題—近隣諸国への電波漏れ放送衛星登場で表面化—」。
- (10) 「メディア効果を志向したアピール行動」の事例として指摘できるもの：『総合ジャーナリズム研究』NO.132, 1990, 「春」号 所収。「東独・情報化政策の遅れ、民衆の『革命』」永井清彦 p.31。その部分を紹介すると、「東の人たちがデモするにあたって、西のテレビカメラを非常に意識して西のテレビカメラに写る場所を懸命にとるわけです。西のテレビカメラに写りやすいように例えば“ドイツ、唯一の祖国”といったようなプラカードを見せる。そういうことが繰り返し繰り返し行われてきたわけですね。東の人たちはメディアの利用という言葉は悪いけれども、西側のメディアにどう訴えるかということ懸命に考えてやってる。それは『革命』前も『革命』後も一緒です。」

参考文献

- 『「おかげまいり」と「ええじゃないか」』藤谷俊雄著、岩波新書、1990。
- 『世論』W.リップマン著、岩波文庫、1987。
- 『世論と群衆』G.タルド著、未来社、1989。
- 『事件の社会学』藤竹 暁著、中央新書、1975。
- 『幻影の時代』D. J. ブーアステイン著、東京創元社、1964。
- 『メディアになった人間』同上著、中央経済社、1987。
- 『情報が世界を変える』徳久 勳著、丸善ライブラリー、平成3. 11.
- 『思想』特集「情報化と文化変容」、岩波書店、1992. 7.
- 『世界』臨時増刊「東欧革命—何が起きたのか—」岩波書店、1990. 4.
- “Medien Journal”(—Medien im Aufbruch—) Österreichische Gesellschaft für Kommunikationsfragen (ÖGK) (Salzburg).